



CLA 関東支部情報誌

Vol.33 2026.1

みどりの手帖



特集

ランドスケープのしごと：
こどもの森とランドスケープ 高野文彰さん/金清典広さん

CLAの技術・事例特集
CLA関東支部ニュース & RLAなヒトビト

いきものコラム その32 「ジャコウアゲハとウマノスズクサ」

生物が様々な環境に合うように進化することで多様な生物が存在しています。単独に進化する生物もいれば、お互いの関係性により一緒に進化する例もあります。例えば、鳥のハチドリはくちばしを長くし、植物も花の奥から蜜を出すように進化したことがよく知られていますが、今回は日本の身近な例をご紹介します。

つる植物のウマノスズクサは虫に食べられないように毒を持つように進化してきましたが、逆にこの毒を利用する虫がジャコウアゲハです。ジャコウアゲハは黒色のチョウで、北海道を除く日本各地で見られます。毒のニオイを頼りにウマノスズクサを探して

葉に産卵します。幼虫は葉をたくさん食べて体に毒をたくわえることによって、天敵の鳥に食べられにくくなります。結果的にウマノスズクサの持つ毒によって幼虫が守られています。このようにジャコウアゲハは、相手の毒に耐えて逆に利用するという、我慢強い独特の生き方を選んだチョウです。

国営昭和記念公園管理センターでは、園内の植物と動物の関係を支える取り組みとして、公園で活動しているボランティアがウマノスズクサの育成にも力を入れていると聞いています。園内を飛翔するジャコウアゲハや、葉っぱについた幼虫を見かけたらこのコラムを思い出してもらえたら嬉しいです。

株式会社ブレック研究所 濱田 将都



CLAの技術・事例特集

❖ 協働で育む緑の未来

—全国都市緑化かわさきフェアから見る新たな設計のかたち—

第41回全国都市緑化フェアは、2024年秋と2025年春に川崎市で開催され、市民をはじめ、地元学生や企業が参画し、世代や分野を超えた交流が花開く、まさに川崎市制100年にふさわしい華やかな祭典となりました。多様な植物が彩る会場では、連日多くのイベントや個性あふれる展示で賑わいを見せ、目標来場者数160万人を上回る人々が訪れました。

本フェアの成功を大きく支えたのは、2023年に(公財)都市緑化機構とCLAとの包括協定が締結されたことを契機に結成された、3社による共同企業体(JV)です。実施計画策定準備調査を取りまとめた(株)ライフ計画事務所に加え、緑化フェアの経験を持つ(株)あい造園設計事務所と(株)総合設計研究所が実施設計ならびに植栽管理を担当し、2期開催×3会場という過去に例を見ない規模に挑みました。週1回行われた定例ミーティングでは、各社の得意分野や考え方を共有したことで、円滑な情報共有がなされ統一感のある会場づくりを実現させました。

こうした垣根を越えた協働体制は、緑化フェアの枠を超え、都市緑地の設計全体の可能性を広げ、未来のまちづくりに向けて確かな一歩を刻むものとなりました。



【上】富士見会場 【中】等々力会場 【下】生田会場



設計者と学生及び企業のワークショップ

CLA関東支部 ニュース



リレー紹介! RLAなヒトビト



板垣久美子 Kumiko Itagaki

登録ランドスケープアーキテクト (RLA)、技術士 (建設部門都市及び地方計画)、一級建築士、自然再生士。造園コンサルタント事務所勤務を経て、2011年より(株)緑の風景計画代表取締役社長、2025年度に会長に就任。主な業務に、国営みちのく杜の湖畔公園ふるさと村、国営ひたち海浜公園みはらしの里、国営昭和記念公園こもれびの里、上野恩賜公園カフェ、竹の台噴水、ほか多数。NPO法人みちのく森の楽校副理事長、2024年北村賞受賞

支部長に聞く—市民とともに歩むランドスケープ—

「市民とともに風景を育てる」そんな言葉が自然と浮かぶ。2024年度よりCLA関東支部長に就任された板垣久美子氏は、30年以上にわたり市民協働の現場に立ち続けてきた。国営公園での実践、資格制度への貢献、そして若手へのまなざし。その歩みには、「風景をつくる」ことの本質が静かに息づいている。

❖ 国営公園での市民協働で育てた農の風景—北村賞受賞に込めた想い

国営みちのく杜の湖畔公園、ひたち海浜公園、昭和記念公園—いずれも市民とともに育ててきた農の風景がある。地元の人材発掘から活動の継続、そして暮らしの伝承まで。「大変だったけれど、圧倒的に楽しかった」と語る表情に現場で過ごした「夢のような時間」がにじむ。地元と国営公園を繋げる役割を果たしてきたという自負がある。

❖ わたしたちの資格“RLA”に込めた想い

「RLAは資格作りの段階からかわった。ランドスケープアーキテクトとしてのアイデンティティを確認しつつ我々が一層専門性を高め磨いていくための資格だと思っている。CPDを取ることも必要なので維持するには日々の努力も必要だが、業界の若手育成のためにも継続していきたい。」

❖ 100年先を見据えて—ランドスケープの未来に立つ人へ

「私たちの仕事は、目の前の施主ではなく世の中、市民のためのものということをお忘れなくようにしてほしい。市民の生活や世の中が良くなっていくことをイメージして頑張してほしい。同じ仕事は2度とない、いつも新しい発見があることがこの仕事の魅力。100年先も残るものであることの責任と誇りを忘れずにいてほしい。」



国営昭和記念公園こもれびの里の小屋

気になるお店

今回は2022年12月にオープンした国営昭和記念公園の中で最も新しい飲食施設をご紹介します。

オカカフェ



国営昭和記念公園のみんなの原っぱの東側に位置するちょっとユニークな外観。店内のテーブル席では、ガラス張りの壁面・ピクチャーウィンドウ越しに公園のシンボルの大ケヤキやみんなの原っぱの全景を(時には富士山も)満喫しながら、焼き立てパンを中心とした美味しいランチやお店のオリジナルコーヒー“オカブレンド”を楽しめます。

建築デザインは隈研吾建築都市設計事務所によるもので、その名の示すとおり公園の芝生広場からせり上がる丘が屋根と一体化した“大地のキャノピー”や、地元“多摩産材”の木

材を使用しぬくもりを感じさせ影の表情も豊かな屋根の木組みなどが特徴的です。(公財)東京都農林水産振興財団の『にぎわい施設で目立つ多摩産材推進事業』の補助対象事業に認証されています(2019年8月1日)。

事業としては、国営昭和記念公園運営維持管理業務の受託者である昭和記念公園パークス共同体【代表企業:(一財)公園財団】が自主事業として整備・運営を担う、新しい官民連携の形態です。

ランドスケープ・建築・食の三位一体が醸し出す“新しいパークライフ”の体験にお出かけてみませんか。

住所 ● 国営昭和記念公園みんなの原っぱ東側
電話 ● 042-528-1751 (自動音声案内)
営業時間・定休日 ● 季節変動あり H.P. 参照
交通 ● 各入園ゲートより徒歩・園内パークトレイン「原っぱ中央売店」下車
H.P ● <https://www.showakinen-koen.jp/facility/facility-13436/>



編集後記

高野さんが逝って早4年が経つ。当時のみどりの手帖 Vol.28の編集後記に微文の様な追悼を書いた。私達は高野さんが残した宿題を解き続けているのだろうか…。巨大なスケール視かつ微細なディテール観、前衛的にして野生的、王道者にして革新者、本質的かつ逆説的…。そうした両義性のスパイラルの中に高野さんの思想・デザイン・人間性があるように思える。嗚呼30数年前に高野さんから受けた薫陶は今も私のランドスケープ人生の基盤を成してる。(編集長 高橋和嗣)

みどりの手帖 Vol.33 2026年1月

発行者 (一社)ランドスケープコンサルタンツ協会関東支部長 板垣久美子
〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-3-7 近江会館ビル8階
TEL 03-3662-8266 FAX 03-3662-8268

企画・編集 CLA 関東支部広報委員会 高橋和嗣、宮地奈保子、泉地善雄、中尾慶命、森田 緑、関根千那望

表紙写真 地底の泉 (撮影:嵯峨剣平・加工:高橋和嗣) / 小窓写真 ドラゴンの砂山

※テキスト及び画像の転載・転用を禁じます。



ランドスケープのしごと： こどもの森とランドスケープ

特 集



コロナ禍を経てニューノーマルの時代となり屋外施設の利用が急速に活発化し、改めてこどもの外あそびへの注目が高まっています。そんな中、圧倒的なデザインとあそびのアクティビティで依然として多くのこども達を引き付けてやまない、国営昭和記念公園「こどもの森」の幾つかの施設が補修を経て供用を再開しています。設計者故高野文彰氏らの当初の設計思想・デザイン観をさかのぼると共に、こども・あそびの今日的課題について計画・設計・整備に高野氏と共に携わった金清典広 CLA 会長にお話を伺いました。

● 計画経緯

計画・設計した当時は、都市の構造、家庭環境、こども達の心と身体、こどもの教育観、自然とのふれあい、自由な余暇時間…多くのものが大きく変わっていく時代でした。そんな中「どこにも無い様な先進的なこどものあそび場を創っていききたい」という昭和記念公園工事事務所の要請を受け、新しいタイプの環境遊具や新しいあそびの展開の可能性を提案しようと、アーティストや建築家など幅広い分野の人たちと協働して取り組みました。「こども達をパーチャルから本物の感触に引き戻す」「体と心のバランスを取り戻す」「中高生も童心に帰れる」「体も不自由な人たちと一緒に遊べる」「大人も一緒に楽しめる」そんな場所を目指し、Playground **by** children, **with** children, **for** children が最も重要な指針となりました。

● アーティストとの協働 (虹のハンモック)

最初の全体計画からアーティストとの実験・協働・相互刺激は重要でした。はじめは世田谷の冒険あそび場の活動の中でファブリックアーティストの堀内紀子さんとの出会いと様々な実験の中で生まれました。ネットの中では一人の動きでみんなが揺れて体感を共有できます。障がい



Playground **For** Children 子どものために
Playground **With** Children 子どもたちと
Playground **By** Children 子どもたちによる
こどもの森 Children's Forest

金清典広 Norihiro Kanekiyo

1957年香川県生まれ。1981年千葉大学園芸学部造園学科を卒業後、高野ランドスケープ(株)に入社。国内およびマレーシア、フランス、中東、中国等多数の海外プロジェクトで活躍。2006年代表取締役役に就任。2003年十勝エコロジパークで第19回都市公園コンクール国土交通大臣賞受賞。2008年高橋建設社屋造園設計で造園学会賞受賞。2017年第25回佐藤国際交流賞、2022年第44回北村賞を受賞。2018年より(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会会長

のある子ども赤ちゃんも乗っているだけで不思議なコミュニケーションができます。インクルーシブデザインのある意味先駆けともいえます。堀内さんからの紹介や連携で、中谷芙二子さん(霧のあそび場)、高橋士郎さん(空気膜のあそび場)などのアーティストとの協働が広がっていきました。

● 軸の創造

アーティスト達と協働した各あそび場の取まりを検討するうちに、ランドスケープ側としての発奮と挑戦も求められました。それが軸の発見と地形の変化(空間の多様性)の創出につながり、設計案の更新を繰り返すたびにランドスケープの構造が明確化していきました。敷地を長尺に貫く南北の軸は時空を超えて連続させたい軸で「月の丘」「地底の泉」「太陽のピラミッド」「星のピラミッド」のつながりを生み出しました。東西の軸には樹木が枝分かれしていく構造を模し、伸びやかな木のデッキとして再構成し霧の森や森の家、北の森などへつなげていきました。



● 霧の森

霧の芸術家中谷芙二子さんとの協働制作でした。霧は気温、湿度、風、日照など季節や自然環境によって様々に変化します。この変化をある程度制御しながら予測不能要素も魅力として取り込んでいるのが中谷さんの霧の彫刻です。低い地面では濃霧で視覚を奪われたり、地形を登り首だけ霧の海の上に出して眺めたり、日常とは全く異なる感覚を動員されながらこども達はあそびをどんどん創造していきます。

● 雲の海 (ふわふわドーム)



楽しそうに遊ぶこども達を見ると苦勞が吹き飛んだと語る金清氏

空気膜のあそび場は造形作家高橋士郎さんとの実験・協働から生まれました。空気膜の上では浮遊感のあるムーンウォークの様な感覚やダイナミックな動きをもたらし、鬼ごっこの様なシンプルなあそびもスペシャルなあそびに一気に変貌します。デザインは公園とは無関係の膜素材を偶然高野さんが見つけたことから始まり試行錯誤を繰り返しました。通風機や

内圧管理など複雑な施設構造で成立つこの種の遊具の第1号でしたが、敢えて特許をとらなかったおかげで各地の国営公園や都市公園など全国に広がり、今では500箇所以上と聞いています。

● ドラゴンの砂山



設計当時はTVゲーム全盛の時期で、こどもたちが外で遊ばないことが社会問題化していました。ドラゴン…のRPGは確かに中毒的に面白いが、ソフトプログラムの仮想空間より、実体験できるランドスケープ空間の方がもっと楽しい!とこどもたちを引き戻したかった。現場の設計監理ではマレー

高野文彰 Fumiaki Takano

1944年中国天津市生まれ。1966年北海道大学農学部卒業。1971年ジョージア大学環境デザイン学部大学院修了、アメリカ造園学会 ASLA より最優秀賞表彰。1975年高野ランドスケーププランニング(株)設立。1980年国営沖縄海洋博覧会記念公園ちびっこ岩で日本造園学会賞受賞。都市公園コンクールでは、1993年国営昭和記念公園こどもの森、他で大巨賞受賞。その他、国内外の数多くのプロジェクトで活躍、海外講演も多数。2008年第30回北村賞受賞。2010~2016年国際ランドスケープアーキテクト連盟(IFLA)日本会長。2019年IFLAアジア環太平洋地区会長。2012年~(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会顧問。2021年ガンで逝去(享年78歳)



月の丘から太陽のピラミッドまで貫く南北軸



太陽のピラミッドの頂上で南北の軸を指し示す金清氏



2024年霧の再稼働を視察する中谷芙二子氏(中央)



シアのスタッフも参加し熱量の高い多様性がドラゴンの造形に結び付きました。当初はベルトコンベアーを仕込みドラゴンが口から砂を吐き出し続けて砂山ができる…という構想でしたが、崩れ続ける砂山の管理はやはり難しくあそび場名に残しました。

● 地底の泉

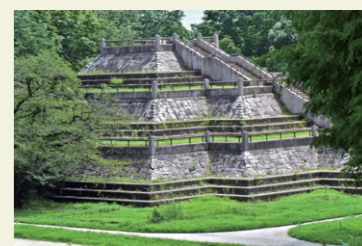
南北の軸上に大きな地形の変化が欲しく、山を造成しようと盛土のために大地に大きな穴を掘りました。直径30mを7~8m掘ると地下水が出てきました。普通ならば土木的に大問題ですが、逆に敢えて生かそうと1年間の水位変化を観察すると隣の残堀川の水位とサイフォンの様に連通していることが分かり地底の泉のコンセプトとなりました。試験施工と設計フィードバックを往復する、後のダイナミックデザインプロセス手法の先駆けでした。地底の泉は現れたり消えたりするだけでなく、泉の底では静寂だったり音が反響したり、上空の景色は円形の空と縁取りされたシラカシの緑のリングしか見えないなど、視覚・聴覚・体感で異体験を味わってもらうねらいでした。



珍しく(半分)冠水した地底の池

● 太陽のピラミッド

南北の軸線上に位置し、南側から東側は山と森に飲み込まれる様にデザインしました。高さ11mの頂上からは南方向の月の丘までと、北方向の星のピラミッドまでの総延長500mを超える軸線の景を一望できます。最近の間伐・剪定などの維持管理のおかげで軸の明示性が向上しています。



Epilogue

質・量とも変化が続くこどもの外遊び、リスクVS遊び場の魅力の葛藤、遊ばなくなった大人、等々こどもと遊びを取り巻く課題は未だ山積している。「こどものあそびとは何か?」と根源的な問いからデザインがスタートしたこどもの森は、今なお多くの示唆を放ってやまない。

[こどもの森の諸元]

計画・設計: 1984~1987年
整備: 1987~1993年
面積: 9.0ha
立地: 国営昭和記念公園(東京都立川市・昭島市)「森のゾーン」(公園の北西端)
開園: I期 1990年5月5日(ワクワク広場、地底の泉)
II期 1991年7月21日(森の家、木工房、太陽のピラミッド)
III期 1992年10月9日(ドラゴンの砂山、石の谷、雲の海、霧の森、虹のハンモック)

こどもの森
<https://www.showakinen-koen.jp/facility/facility-440/>



▶ 子どもの元気・森の不思議

さる2025年11月16日に、花みどり文化センターにて国営昭和記念公園共催による「高野文彰展」・「こどもの森ガイドツアー」が開催されました。



▶ 遊び×子ども×森

また同日その後に、立川市女性総合センターでは「高野文彰を語る会」が開催され木下勇氏(大妻女子大教授)、崎野隆一郎氏(ツインリンクもてぎハローウッズ)、金清典広氏が登壇。多くの方が故高野氏のランドスケープ思想・こどもの森の思想に触れ、語り、故人を偲びました。

